1 派遣期日 平成22年10月15日(金)

2 研修先 学校名 静岡大学教育学部附属浜松小学校
所在地 静岡県浜松市中区布橋三丁目2番1号
<http://www.hamasho.ed.shizuoka.ac.jp>

3 研修内容

第88回 教育研究発表会
「自己」を豊かにする ～学び合いの質を高める～ 〈第5年次〉

(1) 公開授業参観

- 第6学年・国語科 指導者 安間 弘行 先生
- 単元名 「2つの文章を読み比べよう」～エネルギー消費社会・川の自然～
(4/8時) 東京書籍

○ 授業内容

類似した内容が書かれている2つの文章を読み比べ、文中の言葉を根拠に共通点や相違点を明らかにしながら、仲間と話し合っ自分の考えを深めたり筆者の考えに迫ったりしていく。

○ 本時の流れ

- ① めあてについて見通しをもつ。

四つの投書の理由を比べ、自分はどの理由に一番納得できるのだろう。

- ② 自分の考えをもつ。
- ③ グループで話し合い、自分の考えを明確にする。
- ④ 交流を振り返り、まとめる。

グループの仲間と話し合うことで、自分が納得した理由をはっきりさせることができた。

- 第3学年・国語科 指導者 森下 幸子 先生
- 単元名 「登場人物の人がらをとらえよう」～モチモチの木～
(8/11時) 光村書籍

○ 授業内容

「おくびょう豆太」は本当に臆病者なのか、「じさま」は豆太のことをどう思っているのか、登場人物の様子や行動を表す言葉、語り手の語りなどの叙述をもとに読んでいく

○ 本時の流れ

- ① めあてを確認する。

豆太の気もちが、一番よく分かる言葉について話し合おう。

- ② 選んだ理由を書く。
- ③ 理由を交流する。
  - 隣の人や、全体で交流しよう。
- ④ 選んだ言葉(文)や理由を見直す。

(2) 分科会(国語科部会)

- 第6学年授業より
  - ・自分の考えをもつ場面では、声かけ・支援が必要である。グループでの話し合いが、質問・非難・共感するという討論会になりかねなかった。(授業者より)
  - ・本時のめあてとまとめがつながっていない。グループでの話し合いが、1つにまとめよ的になっていた。なんのための交流活動なのかがめあてでつかめなかったようだ。
  - ・1つに絞らず、4つの意見を比較検討することができたはず。どれが納得いく根拠であるかをつめるとよかったのでは。

・それぞれに表現のよさがある。そのよさを使って、今後の自分を表現する時に生かしていく授業を展開する工夫をするとよいのでは。

◇ お互いの意見や考えを聞く学び合いの姿勢があった。自分の考えをもつということは、読みを深めないといけないと感じた。言語活動の質をあげるために、1番にこだわらず、投書それぞれの表現のよさが、今後の自分を表現する時に生かされるようにまとめるとよかったという意見を聞き、とりあげた授業で、どのような子どもを思い・願うかという方向性をきちんともって授業に臨む大切さを改めて感じた。

○ 第3学年授業より

・単元のめあて「本の帯に書くとおきの言葉（文）を見つけるために『モチモチの木』を読む」をつかませることがねらいである。（授業者より）

・場面分けをしながら指導する方法ではなく、「語り手から見た豆太」「じさまから見た豆太」「豆太から見たモチモチの木」のように本文の読み取りをしていた。

・授業の流れは、「めあてに沿った言葉（文）を見つける（サイドラインを引く）－めあてについて最も分かる言葉（文）を選び理由（考え）を書く－ペア交流－全体交流－選んだ言葉（文）とその理由（考え）を見つめ直す」としていた。

・文学作品は、「その世界に子どもを連れて行ってあげられるか」であり、「表戸・引き戸・くつも履かずに・半道…」など子どもの発言からも疑問点が出てくる。モチモチの木＝とちの木で、とちの木は…のように外の情報を入れ、表現する言葉をしっかりおさえることも必要。「ちいちゃんのかげおくり」なども同様。

◇ 子ども達の多様な読みが価値付けられるために、教師側も知識をもつ必要があり、教材研究がとても大切だと感じた。ネームプレートを貼ることで、少数意見に対し、「理由を聞いてみたい」と興味をもっていた。グループの話し合いで、子どもが、「それ、どこの言葉で分かるの？」とよい質問をしていた。全体での話し合いでは、机の配置を変え、意見交換がしやすい環境であった。

○ 研究協力委員の実践発表

・言いたいことを発表するだけでは、「発表し合う」だけで、話し合いは深まらない。互いに意見を絡めさせて発表がつながるから「話し合い」になり、学びの質が高まる。

・国語科の研究で「読む部」「書く部」に分かれて研究している。『発問集』をつくることで、子どもの反応やどんな問いがよいか研究されていた。

(3) シンポジウム・講演会

○ シンポジウム

「授業研究のあり方」をテーマに、「『自己』を豊かにする」をもとに取り組んできた研究を振り返りながら、授業実践についてシンポジウムが行われた。授業研究についての視点として何が大切なのか、教師や子どもにとって授業はどうあるべきか探っていく。

・子どもの人間関係を把握し、実態で教材を選ぶ。担任が意図すること。そのために何をするかで、単元構想や授業構想を練っていいのでは。

・第三者評価から、実践的イメージも立ち上がってくる。

○ 講演会 演題 「教師が元気になる授業研究」 講師 ^{かけ} 鹿毛 ^{まさひろ} 雅治 先生

・「言われた！」ではなく、「言ってくれた！」また、「他の子の意見を聞いてみたい！」等の発言から、意欲を支える心のしくみについて説明。子どもは、「学びたい・分かりたい・できるようになりたい」と思っている。

・「ねらい」はあるけど、「ねがい」がないことがある。教師の思いや意図といった「ねがい」が中心にある授業デザインをする教師が臨まれる。

・児童も教師も「知・情・意」を活性化させ、お互いの相乗効果により、児童は「質の高い学び」を。教師は「よりよい授業デザイン」により「元気な授業づくり」ができる。

4 感想

国語科においては、『言葉にこだわりをもち、豊かな言語生活を送ろうとする子どもをはぐくむ国語科』のテーマのもとに、学び合いの質を高めていた。言葉に目を向け、表現を楽しんだり、言葉を通して自分の思いを表現したりするという実践は、大変参考になった。